

難度★★★★☆・高2レベルの文法知識・単語知識を前提とします。

# 古文解釈の戦略

「編集」はやお (manavee 国語科)

初訂版

manavee school 2013 関西・指定教材

## ■目次

第一回・竹取物語	4
第二回・伊勢物語	6
第三回・源氏物語	8
第四回・方丈記	10
第五回・とりかへばや物語	12
第六回・玉勝間	14
第七回・和歌	16

## ■本書の使い方

- 1 まずは自分で通読してみましょう。わからないところは、ひとまず後で。
  - 2 おおよその意味が解ったら、文法書などを参考にわからなかったところを考えてみましょう。テキストの傍線部は重要ポイントです。
  - 3 授業を聴いてみましょう。テキストの傍線部の解釈や知識などが理解できます。
  - 4 疑問点が残ったら、教室で質問しましょう。なるべく早く答えます。
  - 5 全訳にチャレンジしてみましょう。
  - 6 最後に、テストを解いてみましょう。実力を測って、自分の弱いところをチェック。
- \*両面印刷をして冊子にすると、見開きで上に課題文・下に板書ノートができるようになっています。ぜひぜひ活用してください。

## ■テキスト・授業での傍線部・記号の意味

- 太線**……解釈のポイント。必ず押さえるべし。(授業では黄色線)
- 波線**……文法のポイント。必ず押さえるべし。(授業では白色線)
- 細線**……古文の背景知識など。知っておくところかどこかで役にたつかも。
- 二重線**……指示語など。
- Sマーク・Vマーク**……それぞれ、主語・述語。
- <マーク**……主語・述語・目的語などのかけている箇所。
- ▽マーク・△マーク**……それぞれ順接・逆接。



# 第一回・竹取物語

御門(みかど)おほせ給(たまは)はく、「宮(みや)つこまろが家は、山もちかくなり。御狩りに御行(みゆき)し給はむやうにては見てんや」との給へば、宮つこまろが申すやう、「いとよき事なり。なに心もなくて侍らむに、ふと御行して、御覽ぜむに、御らんせられなむ」と奏すれば、御門おほせ給はく、にはかに目をさだめて、御狩に出で給ふ。御狩し給ひて、やがて、かぐや姫の家にいたり給ひて見給ふに、ひかりみちて、けうらにてゐたる人あり。「これなむ」とおぼして、逃げいる袖をとらへ給へれば、おもてをふたぎて、逃げあへて、おもてに袖をおいて、さぶらひければ、はじめよく御覽じてければ、たぐひなくめでたくおほえさせ給ひて、「ゆるさじとす」「とて」「らびをばしまさむ」として、かぐや姫、こたへて奏す。「をのが身は、この国に生まれて侍らばこそつかい給はめ。いと、出でおはしましがたくや侍らむ」と聞こゆ。御門、「などかさはあらむ。なを強いておはしなん」とおほせ給ひて、御輿よせ給ふに、このかぐや姫、きと人の影になりぬ。「はかなく、くちをし」とおぼしめして、「げにただ人にはあらざりけり」とおぼしめして、「さらば、御ともには率て行かじ。もとの御かたちとなり給ひぬ。それを見てだにかへりなむ」とおほせらるれば、かぐや姫、例のさまになりぬ。御門、なをめでたく、おぼしめさるること、せきとめがたし。

(注) 1宮つこまろ…竹取の翁の名 2御行…天皇の行幸

A series of 20 vertical dashed lines spanning the page, providing a guide for handwriting practice.

## 第二回・伊勢物語

昔、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとにいでて遊びけるを、おとななりにければ、男も女も恥ぢかはしてありけれど、男は「この女をこそ得め。」と思ふ。女は「この男を。」と思ひつつ、さて、親のあはすれども聞かでないありける。

この隣の男のもとより、かくなむ、

筒井筒井筒にかけし まろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに  
女、返し、

くらべこし振り分け髪も肩すぎぬ 君ならずしてたれかあぐべき  
などと言ひ言ひて、つひに本意のごとくあひにけり。

さて、年ごろ経るほどに、女、親なく、頼りなくなるまに、「もろともにいふかひなくてあらむやは。」とて、河内の国、高安の郡に、行き通ふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女、「あし。」と思へる気色もなくて、いだしやりければ、男、「こと心ありてかかるにやあらむ。」と思ひ疑ひて、前栽の中に隠れゐて、河内へいぬる顔にて見れば、この女、いとよう化粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つ白波 たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ

とよみけるを聞きて、限りなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。

まれまれの高安に来て見れば、初めこそ心にくくもつくりけれ、今はうちとけて、手づから飯匙とりて、筒子のうつはものに盛りけるを見て、心憂がりて、行かずなりにけり。さりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つつを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも

と言ひて見いだすに、からうじて大和人、「来む。」と言へり。喜びて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬもの恋ひつつぞ経る  
と言ひけれど、男住まずなりにけり。

A series of 20 vertical dashed lines spanning the page, likely serving as a guide for writing or drawing.

## 第三回・源氏物語

卯月ばかりに、花散里を思ひ出で聞こえ給ひて、忍びて、対の上に御暇聞こえて、出で給ふ。日ごろ降りつる名残の雨、いま少しそそきて、をかしき程に、月さし出でたり。昔の御歩きおぼし出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道の程、よろづのことおぼし出でておはするに、かたもなく荒れたる家の、木立繁く森のやうなるを過ぎ給ふ。大きな松に藤の吹きかかりて、月のかげになびきたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなき薫りなり。橘には変りてをかしかれば、さしいで給へるに、柳もいたうしだりて、築地にもきはらねば、みだれ伏したり。見し心地する木立かなとおぼすは、早う、この宮なりけり。いとあはれにて、おしとどめさせ給ふ。例の、惟光は、かかる御忍ひありきにおくれねば、さぶらひけり。召し寄せ、「ここは常陸の宮ぞかしな。」「しか侍り。」「と聞こゆ。」「ここにありし人は、まだやながむらん。とぶらぶべきを、わざと物せむも所せし。かかるついでに入りて消息せよ。よく尋ね入りてを、うち出でよ。人たがへしてはをこならむ。」「とのたまふ。ここには、いとどながめまざる頃にて、つくづくとおはしけるに、昼寝の夢に故宮の見え給ひければ、覚めていと名残かなしくおぼして、漏り濡れたる廂の端つかたおしのごはせて、ここかしこ御座ひきつくろはせなどしつづ、例ならず世づき給ひて、

なき人を恋ふるたもとのひまなきに荒れたる軒のしづくさへそふ

も心苦しき程になむありける。

(注) 1 亡くなった先帝。常陸宮の父。 2 ろうかの縁側 3 御座所 4 世間の人並みになる





## 第四回・方丈記

おほかた、この所に住み始めし時は、あからさまと思ひしかども、今すでに、五年を経たり。

飯の庵もややふるさととなりて、軒に朽ち葉深く、土居にこけむせり。おのづから、ことのたよりに都を聞けば、この山にこもりゐてのち、やむことなき人の隠れたまへるもあまた聞こゆ。まして、その数ならぬたくひ、尽くしてこれを知るべからず。たびたびの炎上に滅びたる家、またいくそばくぞ。ただ飯の庵のみ、のどけくして恐れなし。ほどせばしといへども、夜臥す床あり、昼るる座あり。一身を宿すに不足なし。かむなは小さき貝を好む。これ身知れるによりてなり。みさこは荒磯にゐる。すなはち人を恐るるがゆゑなり。われまたかくのごとし。身を知り、世を知れば、願はず、わしらず。ただ静かなるを望みとし、憂へなきを楽しみとす。

すべて世の人の住みかを造る習ひ、必ずしも、身のためにせず。あるいは妻子・眷属のために造り、あるいは親昵・朋友のために造る。あるいは主君・師匠、および財宝・牛馬のためにさへこれを造る。われ、今、身のために結べり。人のために造らず。ゆゑいかんとなれば、今の世の習ひ、この身のありさま、伴ふべき人もなく、頼むべき奴もなし。たとひ広く造れりとも、たれを宿し、たれをか据ゑん。

それ、人の友とあるものは、富めるをたふとみ、ねむごろなるを先とす。必ずしも、情けあると、すなほなるとをば愛せず。ただ、糸竹・花月を友とせんにはしからじ。人の奴たる者は、賞罰はなほだしく、恩顧厚きを先とす。さらに、はぐくみあはれむと、安く静かなるとをば願はず。ただ、わが身を奴婢とするにはしからず。

(注) 1 ヤドカリ 2 魚の一種 3 右往左往しない 4 配下の者 5 親しいもの 6 楽器・自然



## 第五回・とりかへばや物語

いづれもやうやう大人び給ふままに、若君は、あさましうもの恥ぢをのみし給ひて、女房などにだに、少し御前遠きには見え給ふこともなく、父の殿をもうとく恥づかしくのみおぼして、やうやう御文習はし、さるべき事どもなど教へきこえ給へど、おぼしもかけず、たないと「恥づかし。」とのみおぼして、御帳の内にもうづもれ入りつつ、絵かき、雛遊び・貝覆ひなどし給ふを、殿はいとあさましき事におぼしのたまはせて、常にさいなみ給へば、はてはては涙をさへこぼして、あさましう「つつまし。」とのみおぼし「つつ、ただ母上・御乳母、さらぬはむげに小き童などにぞ見え給ふ。さらぬ女房などの御前へも参れば、御几帳にまつはれて、「恥づかし、いみじ。」とのみおぼしたるを、いとめづらかなる事におぼし嘆くに、また姫君は、今よりいとさがなくて、をさをさ内にもものし給はず、外にのみつとおはして、若き男ども・童べなどと、鞠・小弓などをのみもて遊び給ふ。御出居にも、人々参りて文作り、笛吹き、歌謡ひなどするにも走り出で給ひて、もろともに、人も教へきこえぬ琴・笛の音もいみじう吹きたて弾き鳴らし給ふ。ものうち誦じ、歌謡ひなどし給ふを、参り給ふ殿上人・上達部などは、愛でうつくしみきこえつつ、かたへは教へたてまつりて、「この御腹のをば姫君と聞こえしは、ひが事なりけり。」などぞ、皆思ひあへる。殿の見合ひ給へるをりこそ、取りとどめても隠し給へ、人々の参るには、殿の御装束などし給ふほど、まづ走り出で給ひて、かく馴れあそび給へば、なかなかえ制しきこえ給はねば、ただ若君とのみ思ひて、もて興じうつくしみきこえあへるを、さ思はせてのみものし給ふ。御心のうちにぞ、いとあさましく、返す返す「とりかへばや。」とおほされける。

A series of 18 vertical dashed lines spanning the page, likely serving as a guide for writing or a separator for columns.

## 第六回・玉勝間

兼好法師が徒然草に「花は盛りに、月はくまなきを見るものかは。」とか言へるは、いかにぞや。いにしへの歌どもに、花は盛りなる、月はくまなきを見たるよりも、花のもとには、風をかち、月の夜は、雲をいとひ、あるは待ち惜しむ心づくしをよめるぞ多くて、心深きも、ことにさる歌に多かるは、みな花は盛りをのどかに見まほしく、月はくまなからんことを思ふ心のせちなるからこそ、さもえあらぬを嘆きたるなれ。いづこの歌にかは、花に風を待ち、月に雲を願ひたるはあらん。

さるを、かの法師が言へることくなるは、人の心にさかひたる、後の世のさかしら心の、つくりみやびにして、まことのみやび心にはあらず。かの法師が言へることども、このたぐひ多し。みな同じことなり。すべてなべての人の願ふ心にたがへるを、みやびとするは、つくりごとぞ多かりける。恋にあへるを喜ぶ歌は、心深からず、あはぬを嘆く歌のみ多くして、心深きも、あひ見んことを願ふからなり。

人の心は、うれしきことは、さしも深くはおぼえぬものにて、ただ心かなはぬことぞ、深く身にしてみてはおぼゆるわざなれば、すべてうれしきをよめる歌には、心深きは少なくて、心かなはぬすぢを、悲しみ憂へたるに、あはれなるは多きぞかし。さりとして願はんは、人のまことの情ならぬや。

また、同じ法師の、「人は四十に足らずで死なむこそ、めやすかるべけれ。」と言へるなどは、中ごろよりこなたの人の、みな歌にも詠み、つねにも言ふすぢにて、命長からむことを願ふをば心ぎたなきこととし、早く死ぬるをめやすきことと言ひ、この世をいとひ捨つるをいさぎよきこととするは、これみな仏の道へうつらへるものにて、多くはいつはりなり。言ひいさぎも言へ、心のうちにはたれかはきは思はむ。

たとひまれまれには、まことにしか思ふのあらむも、もとよりのまごころにはあらず、仏の教へにまごへるなり。人のまごころは、いかにわびしき身も、早く死なばやとは思はず、命惜しまぬ者はなし。されば、万葉などのころまでの歌には、ただ長らく生きたらむことをこそ願ひたれ、中ごろよりこなたの歌とは、その心の歌うらうへなり。すべて何事も、なべて世の人のまごころにさかひて、異なるをよきことにするは、外国のならひのうつれるにて、心をつくり飾れるものと知るべし



## 第七回・和歌

玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶることの 弱りもぞする (式子内親王)

今はただ 想い絶えなむ とばかりを 人づてならで いふよしもがな (左京大夫道雅)

あらたまの 年のをはりに なるごとに 雪も我が身も ふりまさりつつ (古今集・冬)

大江山 いくのの道の 遠ければ まだふみもみず 天橋立 (金葉和歌集・雑上)

みちのくの しのぶもぢずり 誰ゆゑに 乱れそめにし 我ならなくに (古今集・恋)

来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに 焼くや藻塩の 身もこがれつつ (新勅撰集・恋)

村雨の 露もまだひぬ まきの葉に 霧たちのぼる 秋の夕暮れ (新古今集・秋下)

から衣 きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる 旅をしぞ思ふ (伊勢物語・九段)



A series of 17 vertical dashed lines spanning the page, likely serving as a guide for writing or a separator for columns.

3 卯月ころに、花散里をお思い出し申されて、こっそりと対の上にお暇乞い申し上げてお出かけになる。数日来降り続いていた雨の名残、まだ少しぱらついて、風情ある折に、月が差し出ていた。昔のお忍び歩きが自然と思いついて、優艶な感じの夕月夜に、途上、あれこれの事柄が思い出されていらつしやるうちに、見るかたもなく荒れた邸で、木立が鬱蒼とした森のような所をお通り過ぎになる。

大きな松の木に藤が咲きかかって、月の光に揺れているのが、風に乗ってさつと匂うのが慕わしく、どれがそれからともない香りである。橘のとは違って風趣があるので、のり出して御覧になると、柳もたいそう長く垂れて、築地も邪魔しないから、乱れ臥していた。

「かつて見た感じのする木立だなあ」とお思いになると、それもそのはず、この宮邸なのであった。ひどく胸を打たれて、お車を止めさせなされる。例によって、惟光はこのようなお忍び歩きに外れることはないので、お供していたのであった。お召しになって、

「ここは常陸宮であつたな」「さようございます」と申し上げる。

「ここにいた人は、今も物思いに沈んでいるのだろうか。お見舞いすべきであるが、わざわざ訪ねるのも大げさである。このような機会に、入って便りをしてみよ。よく調べてから、言い出しなさい。人違いをしては馬鹿らしいから」とおつしやる。

こちらでは、ひとしお物思いのまさるころで、つくづくと物思いに沈んでいらつしやると、昼寝の夢に故宮がお見えになったので、目が覚めて、実に名残が悲しくお思いになって、雨漏りがして濡れている廂の端の方を拭かせて、あちらこちらの御座所を取り繕わせてなどしながら、いつになく人並みになられて

「亡き父上を恋い慕って泣く涙で袂の乾く間もないのに

荒れた軒の雨水までが降りかかる」

というのも、お気の毒なことであつた。

4 そもそも、ここに住み始めた頃には、ほんの暫くと思つていたのだが、すでに『年を経過した。仮の庵といいながら、ここもはやふるさととなつてきて、軒には朽ちた木の葉がつもり、土台には苔も生えた。事のついでに都の事を聞くと、私がこの山に入ってから、多くの高貴のお方が死んだ。まして、そういう身分でない人々は数を尽くして知ることを得ない。度々の火事によつて消失した家々もまた幾許であつたことであろう。ただこういう仮の庵こそ、何事もなく安心だ。狭いとはいえ、夜寝る場所が無いわけではない。昼に座る場所も無いわけではない。一身が住まうに何の不足も無い。ヤドカリはできるだけ小さい貝を好むという。これは、変事があることを恐れてのことだ。ミサゴは荒磯にいる。これは、人が怖いからだ。私もまたこれに同じ。物事を知り、世の無常を知れば、無益な願いは持たず、右往左往はせず、ただ閑静をのみ望み、悩みの無いことを楽しむ。

すべて、世人が家を作るのは、必ずしも、自分のためにするのではない。場合によっては、妻子や眷属のために作つたり、或いは親しい者や友人のために作る。また或いは、主君や師匠のたれに作り、財宝や牛馬のためにも作つたりする。

私は、いま、自分のためにだけ庵を結んでいる。人のために作つたのではない。なぜかといえれば、この無常の世にあつて、家族もなく、仕えてくれる使用人もいない。だから、広く作つても宿す人がいない、住ませる人が居ない。

そもそも、人の交友というものは富んでいるものを優遇し、親しい者を優先する。必ずしも、情が厚いとか、正直などを好むわけではない。だから、楽器や自然を友として生きるのが一番だ。従者は、恩賞を沢山くれる人やよく面倒を見てくれる人を重んじる。優しくいたわってくれとか、心安い人とかを願うのではない。だから、従者を持つのではなく、自分自らが自分の従者となるのが一番だ。

5 どちらもだんだん大人になりなさるにつれて、若君はあきれるほど恥ずかしかつてばかりいらつしゃつて、女房ですら身近ではないものには姿をお見せすることもなく、父殿でさえもよそよそしく恥ずかしいとばかりお思いになって、かろうじて漢籍を学ばせてしかるべきことなども教え申し上げなさるけれども、思いもおかけにならない。ただとても恥ずかしいとばかりお思いになって、御帳の内側にばかり隠れて、絵を描いたり人形遊びや貝覆などなさるのを、殿は大変あきれることにお思いになり、いつもたしなめなされると、はては涙をまでもこぼして、情けなく気が引けるとだけお思いになっては、ただ母上や乳母、そうでないものは本当に小さな童などにかお会いにならない。

そうでない女房などが御前に参上すると、御几帳について離れないで、とても恥ずかしいとだけお思いになるのを、とても変わっていることと思ひ悲しみなさるけれども、また姫君は、今のことよりもたちが悪く、めったに家の中にいらつしゃらない。外にはかりずつといらつしゃつて、若い男や童たちと鞠や小弓などでばかりお遊びになる。客間に人々が参上して、漢詩を作り、笛を吹き、和歌を詠んだりするにも、走つて出ていらつしゃつて、そろつて、誰も教えていない琴や笛の音も、大変上手に吹いてひきならしなさる。

漢詩を口ずさみ、歌詠みなどなさるのを、いらつしゃつた殿上人や上達部は可愛がつては、一方では教え申し上げて、こちらの女性にお生まれになった御子を姫君と聞いたのは、間違いであつたのだなどと皆互いに思つた。

殿がお見つけになる時は、引きとどめてでも隠し申し上げ、人々が参上する時には、殿が衣服などをととのえなさる間に、まずは走り出なさつて、このようものなれて遊びなされると、かえつてお止め申し上げになれないので、ただ若君だとばかり思つて、互いに面白がつて可愛がり申し上げるのを、ただもうそのように思わせていらつしゃる。御心のうちはとても驚きあきれるばかりで、何度もとりかえたいものだとお思いになつた。